

第3回「学び」の選択肢拡大に向けた検討懇話会

日 時：平成28年2月1日（月）13:00～15:30

場 所：アストプラザ会議室1（津市羽所町）

出席者：安藤委員、貝ノ瀬委員（座長）、清水委員、力石委員、
西口委員、藤沢委員、前野委員、鈴木知事

はじめに

●鈴木知事

- この検討懇話会は、いよいよ今日で最終回であるが、もともと予算や資源を気にせず、大胆な発想でいろいろなアイデアをいただきたいということで進めてきたので、本日も最終的に何か成果物を取りまとめるというよりは、引き続きいろいろな思い、アイデアをいただければと思っている。
- 資料8で「三重県教育施策大綱（仮称）（最終案）」を配らせていただいたが、去年の4月に法律が変わり、知事が教育方針を策定することになったので、貝ノ瀬座長にも入っていただいて「総合教育会議」を10回開催してきた。
- 「総合教育会議」10回というのは全国最多で、それほど私も2期目は特に、教育・人づくりに思いを込めてやっていきたいということである。教育・人づくりの取組に終わりはないので、引き続き委員の皆さんには、三重県の教育・人づくりのために様々な場面でご支援、ご協力を賜りたい。
- 特に今年は、「サミット」という形で三重県に新たな歴史の1ページが開かれる年であるので、教育・人づくりについても新たなフェーズを迎えていきたい。

各委員意見

○力石委員

- 前回、前々回でも、私が特に申し上げたのは、やはり家庭教育が教育の一番原点にあるということである。今、一般的な社会に暮らす人間としてのマナーが、本当に我が国はおろそかになってきているのではないか。家庭教育の中で、親が子どもを躾ることがまだまだ欠けているので、私はこれが一番大切なことだと思う。
- 親に対して、子どもをどう躾るかというプログラムはいろいろあると思うが、県や自治体がどのように取り組んでいるか現状をよく存じ上げていないが、まずは家庭教育が一番大切であると思う。

○清水委員

- 昨年、アメリカのアナポリスの海軍士官学校で副校長と懇談することができた。教育の基本方針として「知育」「徳育」「体力」の3つの柱を掲げているが、この中で一番大事にしているのが「徳育」であり、「寮教育」と「食事」を通して人間性を養っているとのことであった。これは皇學館大学の教育方針と同じであり、本学も2年制の寮を備えるとともに、3つの方針の「徳育」を最も大事にするという建学の精神を持っている。
- 日本の教育を語る場合に、その対象とその場等によって議論の仕方が随分違ってくると思う。幼少期の子どもを育てる場合と、高等教育と中等教育と成長段階に応じて様々な違いがあると思うが、それらに共通している大事な点が今の3つに示されており、これは教育の原点でもあると思う。

- 今、教育のあり方を振り返ると、ややもすれば知育偏重となり、徳育が軽視されてきたのではないか。もう一度基本の原点を見つめ直す必要があると思う。
- 三重県にとって今年は「サミット」という、まさにこの機会を教育においても活用することが非常に大事だと思う。「遷宮浪漫」という本は、一般市民の方も、英語を学んでいる高校生でも話をしてもらえる内容なので、日本の、特に神宮を中心とした伊勢志摩の理解を外国語で語る1つの教材に使っていただければありがたい。
- サミットは、日本の精神文化を理解してもらいたい機会になる。世界のリーダーたちが神宮を一緒に参拝してもらえれば、誠に有意義だと思う。7カ国の国々はみなキリスト教だが、キリスト教以前の神話を持っていた国でもある。日本人の基層信仰である神道とヨーロッパの思想や文化の根底部分で通じ合うとすれば、自然や環境や生命に対する畏敬であり、そのことが神宮の森厳とした境内の空気にもふれ、悠久の古から続く平和と安寧の祈りと共に感得してもらえることを願っている。
- 日本人自身、とりわけ三重県の青少年が世界と日本の違い、国際的な視野や国際的な理解を深めるいい機会になるのではないか。三重県の教育界にとっても新しい1ページを開く機会になると思う。

○安藤委員

- 家庭教育には、子どもを家庭の中でどう教育するかという観点と、親の学びをどう実現するかという観点がある。大人は大人から学ぶというよりも、子どもから気づかされる形で学ぶこともあるので、「子どもたちの本音イベント」のような大人と子どもの討論会の実施、あるいは子どもたちの大人に対する本音を探り、それを季刊誌として県が発行するなどしてはどうか。大人は大人の力ではなかなか変わらないので、「大人は子どもの力で変わる」という視点が大事である。
- 生きていくことに直結する生活から学ぶという部分もあると思うので、生活やお得感と結びつけるような、例えば、力を合わせて生きるための地域コミュニティを人工的につくる。離島は日本の縮図なので、離島文化、離島コミュニティのようにみんなで力を合わせれば、規範意識も生まれるし、道德教育も自然に生まれる。
- サミットから発信する観点では、目に見えない精神性を可視化できる。日本はこのような生活の中で精神性を育んできたというモデルを発信できる。加えて、例えば日本で培われてきた自然観や死生観、参拝の心を県が冊子にし、数カ国語に翻訳してサミット以降発信し、総合学習の副読本としたり、年に1度作文コンクールを実施する。
- 家族みんなで力を合わせて第1次産業に従事するグループに、助成金や税制優遇などでお得感を加えることで、田舎に幸せのモデル地区をつくることのできるのではないか。福祉インフラや教育環境などをサポートして、モデル地区をつくってはどうか。
- 社会教育の観点では、県がある程度学費負担しながら、藩校と言うか、エリート教育を行う。学校教育に加えて、志や勇気、見聞、経済、交渉など志ある子たちを選抜し、「その力を未来のふるさとに活かしてもらおう」という条件で県がサポートする。
- 都市部の高齢者を地方に移住促進することにより、地方の子どもたちの社会教育環境を充実させる。「高齢者×子ども」を地方で実現させる。
- 「貧困の連鎖」という言葉があるが、そういった世帯に対する公立塾や学習支援などに積極的に取り組む。
- コンビニやスマホが子どもたちの生活環境に大きな影響を与えているので、夜間10時以降に子どもたちだけでコンビニに入る姿を見たら、どこかに一報を入れる仕組みをつくる、スマ

ホは何時以降使用禁止にするなどの条例をつくる。

- 教職員の考課システムをつくり、教職員の言動を考課項目の1つに入れる。また、入試制度にも問題があるので、内申書に重きを置くよりも、例えば傾斜配点での特色化選抜も含めた学力選抜を年2回実施するなど、入試制度そのものが変わる必要がある。
- 今回サミットで国際色豊かな地域として発信していくにあたり、海外留学の単位互換を推進するとか、立命館アジア太平洋大学のような留学生が50%を超える国際色豊かな大学の開校や学部の新設、また、統廃合による校舎利用の一環として、例えば国際色豊かな学校やエリート教育校などにチャレンジしていく。
- 三重テレビやFM三重等の地域メディアに、地元の子どもたちに照準を合わせた番組を作成してもらおう。子ども版「情熱大陸」みたいな番組で、志を立てることや困難の乗り越え方、一步を踏み出す大切さを熱く語りかけるような番組を大々的にPRすることで、協賛企業も社会貢献（CSR）として多くが前向きに取り組まれるのではないかな。
- そこで1つのモデルができれば、三重県提携タレントに番組やイベントを依頼したり、学生自身が番組を作成することも含めて、ムードをつくっていく。そこから「生き方タレント」や「青春ユニット」、「ゆるキャラ」ではない「熱（あつ）キャラ」や「三重キャラ」、「MM A（三重メッチャ熱い、三重マジであります）」などをデビューさせ、ワクワク感を醸成していく。
- 学校でも、例えば自分の未来年表を書いて、15歳のときはこうありたいとか、ムードに乗りながら、多角的につくり上げていく。

○前野委員

- 大学院で新しい教育として「幸せの教育」と、「イノベーション」や「プロジェクト・ベースト・ラーニング」の研究をしている。従来の教育はバラバラで、「総合的学習」というのがあがるが、本当は総合的な学習ができていないのではないかな。
- 人々は幸せになるべきなので、幸せとあらゆる学問や学びがどうつながるか、という研究をしている。創造的に生きるという意味で、「イノベーション」や自分が活躍する「プロジェクト・ベースト・ラーニング」「アクティブ・ラーニング」という教育形態を大学院で進めており、小中高でも取り入れることができればいいのではないかな。
- 幸福学というのは実は倫理学である。どう生きるべきかと言うと、普通、賄賂はいけなとか不正はいけなとか、ネガティブな面に目を向けるが、そうではなくてポジティブに、自分はどのような夢を持ち、どのように人とつながり、どのように自分らしくアクティブに生きるかという学問である。
- 埼玉県横瀬町で、今、小中学生全員に幸福学を教えることを町長と一緒にやっている。全員に幸福学を教えることが、総合的な学習と部分的な学習をつなげる人間力育成になるのではないかなと思う。
- なぜ幸福学がいいかと言うと、みんなが夢を持ち、一人ひとりが潜在的才能を活かし、人々がつながり合って、信頼し合って、感謝し合って、楽観的に自分らしく生きるという、「夢」と「つながり」と「楽観性」と「自分らしさ」であり、夢とか自分らしく生きる力が強ければ、起業したり、自分らしい新しいことをつくり上げたりする創造性にもなるので、幸福学は、ポジティブに活躍する人をつくるという面と、今の学校教育の問題点と言われているものを同時に解決できるものだと思う。
- 家庭教育については、もちろん躰とか基本的なことを教えるのもあるが、家庭で親が夢を持って生き生きと生きていて、それが子どもに伝わり、子どもも次の時代の夢を持つようにな

らなければいけないのに、親も閉塞感があって子どものやる気が出ない。今まさに家庭教育が不幸になっていて、その挙句、子どもが騒いでいても躰もできないことになっているので、総合的に家庭教育をよくする全体的な幸福教育、人間教育を三重県とも深く関わり合って、トータルにやっていくことができればよい。

- その中の1つで、三重県と相性がいいと思うのは、森での教育である。手つかずの森というのはものすごくアナロジーがあるので、自分の小ささとか、あるいはみんなが助け合って生きている共生とか、あらゆる人間の学ぶべきこと、戦って勝つとかよりも、みんな一緒にやっているとすることが森にはあるので、森の中で学ぶという教育を横瀬町とか、山中湖とか那須でやっている。伊勢神宮の森を活かして、協力して生きる、自然とみんなが一緒になって生きるという、日本の象徴である三重県がこれを発信すると、調和的な幸せな県になると思うので、できれば「森の幸せ」というのを一緒にやらせていただきたい。
- イノベーション教育もいろいろやっており、「プロジェクト・ベースト・ラーニング」や「アクティブ・ラーニング」で、一人ひとりが与えられたものを学ぶのではなく、自分たちで能動的に学ぶ教育をしている。しかし、PBLやアントレプレナーシップを教えても、幸福学とつながっていないと起業まで行かない。企業内でも自分の夢を、本当に自分がやりたいことを見つけて、それがプロジェクトとつながると困難でもやり抜くが、新規事業を思いついてビジネスモデルができて、やる気がないと結局だめになる。
- 「未来年表」の話があったが、自分の未来をどう描くのかという教育を徹底的にやるのが幸福学の第1であり、それをプロジェクト・ベースト・ラーニングでもやっていくのがいいのではないか。自分が人生をかけて本当にやりたいことは何か、人生でなくても小学生が今本当に興味を持って、勉強したくてたまらないものは何かというのを、勉強でも遊びでもいいので見つけていく、マイプロジェクト・ベースト・ラーニングが有効である。夢があって、みんなが協力してやり抜くということを、家庭でも小中高でも、それから大人も、みんなに浸透させることを三重県とも一緒にやれたらいいと思う。

○西口委員

- 私が勤務している学校は転出・入が多く、新しく入ってみえた保護者はとても不安だという話をされるが、子どもたちはどんな子どもが転校してきても、その日のうちにその子に合わせて上手に引き入れ、日々の活動につなげている。子どもの柔軟性はすばらしいものがあると思う。
- 子どもの持っている柔軟性をいかにそのまま引き継いで大人にしていけるのか、大人の役割は本当に重要であると思う。先入観を持たずに子どもたちが自由に学べるような、学びの選択肢を学校の中にたくさんつくろうと様々な取組をしているところである。
- 6年生の子どもに「ようこそ先輩」という話で、気象予報士で気象キャスターをしている先輩に来てもらったが、その方が開口一番言われたのが、「私の仕事は、校長が小学生のときには無い職業でした」ということだった。「学び」の選択肢を考えると、大人は今あることを基にどうしたらいいのかを考えるが、今から生きていく子どもたちは地図のない社会を生きていかなければならないので、周りにいる大人がしっかりと、必要なことは何かをもう一度洗い出し、対応していかなければならない。

○貝ノ瀬座長

- アメリカの学者によると、今の小学生が就職する頃には、今ある仕事の60%はなくなっているそうである。そのときに新しい仕事が出てくるのか、または本当に仕事がなくなってロボットに全部やってもらうことになるのかははっきり分からないが、キーポイントになるのは、

どんな社会になろうと、どんな状況になろうと生きていける、そういう力をつけるしかないのではないか。

- 単に社会の変化に適応するというような消極的な力ではなく、もっと一歩前に出て社会をつくっていく、どんな社会になろうとも生きていく、「生き抜く力」をつけるんだというイメージが分かりやすいと思う。

●鈴木知事

- 「生き抜いていく力」を今回の教育施策大綱のキーワードの1つにした。「生きる力」だけではなく、「生き抜いていく力」という表現にさせていただいたところ、賛否両論あり、競争を煽るのではないか的なことも言われたが、今まさに議論していただいたとおりであるので、その思いで取り組んでいきたい。
- 「花まる学習会」の高濱正伸さんに名張で講演してもらったが、エストニアでマイナンバー制度を入れたら、税理士と公認会計士の仕事がなくなったとのこと。仕事が絶対あるだろうと思っても、1つの制度変更やシステムが完璧になったことで、そういうことが生まれるので、今あるものだけをベースにするのではなく、そういうこともあり得るといふ根幹部分のことが大事だと思う。
- 森の中での教育であるが、明日の定例記者会見で「三重まるごと自然体験構想」を発表させていただく。これは、三重県を自然体験の聖地にしようということで、野外体験保育の必要性・重要性の効果測定の調査をやったので、それも併せて最終的に年度内に発表させていただく。三重県は県土の3分の2が森林なので、自然を活かした体験活動によって、何にもないところから自分たちで遊びも考え、みんなでゲームやルールも編み出し、ルールを守らない者に対してみんなでいろいろ議論することが生まれてくる。「三重まるごと自然体験構想」と幸福学との関係の議論などは、ぜひ一緒にやらせていただきたい。
- 2月に江田島兵学校に行くが、そこに「士官である前に紳士たれ」という言葉がある。1人の人間として身につけておくべき道徳、それは職業にかかわらずそういうベースがあると江田島兵学校ではずっと言われてきたので、改めて根幹部分としてしっかりしていくのが大事である。

○藤沢委員

- 資料7の「幼児教育」のところはかなり空いているが、海外へ行くと、小学校へ上がる前の教育が人間の可能性や能力を開発していく上で非常に重要だという議論がなされており、その観点で、この部分の充実を真剣に考えていかなくてはいけないと思う。
- 今の子どもたちは、私たちの時代とは違う新しい仕事に就く可能性が高く、ロボットやAIが充実したあとの社会になる。人間が取り組むべき仕事というのは相当人間にしかできないもの、例えば愛情とか共感力とかそういうもので、共感力はやはり10歳までにいかに身につけておくか、それは親や大人からの愛情をどれくらい受けているか、人にお世話になったとか、そういうものがすごく重要になる。そういう意味で、幅広く幼児教育を受けられる環境を三重県が主導して、全国に先駆けてそういう機会をぜひつくっていただけたらありがたい。
- 資料7で、新しいことにチャレンジしていく、教育を受ける人の立場で考えているのは正しいことだが、その受ける人に教育を授ける方々の教育はものすごく重要で、その柱をどこかにきちんと入れておかないといけない。今、政府でもいろいろなトライアルをやっているが、試している期間だけは実現しているが、その期間が終わるとまた元に戻っていることがすごく多い。サミットもそうだが、指導者を育成するという観点からいろいろな取組をしていただくことが、持続可能な教育改革につながるので、「教員の教育育成」というのをぜひ入れ

ていただけたらありがたい。

- アジアのコングロマリットとか大企業の人たちと話していると、日本のエンジニアリング教育をぜひ輸出して欲しいという意見が非常に多い。文部科学省も今回予算を取りにいったが、実際は取れなかった。例えばインドネシアのコングロマリットでは、わざわざMITとかアメリカの大学から教員を呼んでエンジニアリングを学ぶが、1回の授業で300万円とか、日本の教員と比べて破格の金額を支払っている。三重県にも高専や大学の工学部があると思うので、そこの若い教員や定年退職した教員などに海外で授業をしてもらい、そこから国際交流を深めていくことも検討いただけたらいいのではないかと。

○力石委員

- サミット開催を活かしたこれからの教育施策の中で、よく「国際性」ということが言われるが、まだまだ日本人は世界に出たときに、自分の意見をしっかりと断言することがほかの国に比べて非常に少ないので、例えば三重県は日本で最も留学生が多い県であるというような、サミットをきっかけにもっと世界で勉強していくような環境づくりが大切ではないかと。
- 特に、ホテル・外食、観光産業などは、アメリカでは2年制、4年制を含め「ホテル・レストラン経営学部」を持った学校が大体300校ぐらいあり、ヨーロッパのほとんどの国でも「ホテル・レストラン経営学部」を持った大学があるが、日本はまだ1校もない。医療関係とか建築デザイン、環境問題など、圧倒的に海外の専門的な大学は進んでいるので、もっと県として奨励していくような形で、5年、10年、20年の中で国際的な感覚を持った三重県人を育てていくのも、サミットの1つのきっかけにされたらいいのではないかと。
- サミットをきっかけに三重の方々、いろいろな国から来られる方を温かくおもてなしする環境づくりがとても大切である。北海道の上川町では、「おもてなしの心 かみっきーシップ」というのがあり、町全体で町に来られた方を温かくおもてなししようという活動をしている。サミットをきっかけにそういう活動をするのは、これからのまちづくりの中でとても大切で、世界にアピールするととてもいい機会になると思う。

○貝ノ瀬座長

- 私も同じ意見であるが、「親切に」というのはもちろんだが、子どもも大人も、少なくとも自分の町の良さとか歴史を語れる、それから簡単な英会話ができる、ぐらいのことを一人ひとりがサミットを機会に身につけてもらうことができればよい。いろいろな三重の良さとか歴史などについて、神話なども含めて知る機会をこの際持つと、本当のおもてなしになると思う。

欠席委員の意見

○鈴木委員（事務局が説明）

- 企業と連携した地域による家庭教育支援について、現在の家庭状況ではなかなか家庭にすべてを委ねることは難しいので地域社会で支援していく。特に三重県のようなところでは、大企業だけではなく、地域の中小企業での企業教育や子育て支援の取組と連携してやっていくのがよいのではないかと。併せて、公民館の再活用や、スポーツ少年団など地域にある様々な場所を活用することで、地域文化の見直しをしていけばどうか。
- 「幼児教育の重要性」について、今回キーワードとして「2つの“そうぞう”を育てる」ということ。これは、人の学びにとって、手と脳をどのように使うかということが重要で、2つの「そうぞう」というのは、手を表す「創造」と頭を表す「想像」がある。それを両方育てるのが「あそび」であり、幼児期こそ、この2つの「そうぞう」を育むよい時期である。

これは、後々も手を動かしながら学ぶことは非常に重要であり、また、地域での工作教室や企業によるものづくり塾なども、実際にそれをやっていく上で、具体的な話として重要ではないか。

- 「人脈」「コミュニケーション力」「共に生きる」について、これは三重県教育施策大綱の「生き抜いていく力」という言葉に対してコメントを述べられたもので、生き抜いていく上で大切なのは「人脈（ネットワーク）」であり、この人脈を広げるためにはコミュニケーション力が重要であり、また自分にとっての社会を広げ、相手を知り、相手も自分のことを知るといったことが必要になる。日本には「持ちつ持たれつ」という言葉がある。欧米の場合は「give&take」という対立的な言い方になってしまうが、日本人の場合はこれが「助け合い」「共に生きる」「認め合う」という考え方になる。
- 「今後の日本人に必要なこと」について、今後の日本人にとって音楽とデザインの素養は非常に注目すべきである。特に日本においてはデザイン的な要素があまり重視されない面があるので、そういったところをもう一度見直す。本来日本には、庶民の暮らしの中に音楽やデザインが存在していた。特に近年、クールジャパンなどの形で見直されているが、地方創生のような地域のアイデンティティーや良さを再認識していこうとする流れの中で、音楽やデザインの観点からの人づくりも必要ではないか。
- 特に、鈴木委員のおっしゃるところは江戸期以降で、例えば木綿の文化や伊勢型紙など、暮らしの中にきちんと日本流のデザインや文化があったというのが前提で、明治・大正期の思想家の柳宗悦氏が、暮らしの中の文化に光を当てた「用の美」の考え方についてもふれられている。
- 提案として、「サミットの成果を生かしていくこと」について、サミットのテーマはまだ決まっていなくてもいいかもしれないが、サミットで語られたこと、議論されたことを三重県としてどのように残していくかが重要である。サミットが終わってからの高校生サミットなどで、議論の内容や各国首脳の見解、コメントなどを共有して議論し、残していくような取組をしてはどうか。サミットのテーマ、例えば環境や平和など、世界的な課題を解決していく上で「日本的なものの方、考え方」、特に「多様性を認め合う共生の考え方」などが重要であることを、世界の中で説得力を持って発信していけるのではないか。これらと深く関わりのある三重の自然や歴史・文化の多様性とその世界的意義などを三重県民自身が認識して、そのことで三重を誇りに思う気持ちが醸成されることにつながるのではないか。

各委員意見

●鈴木知事

- 「幼児教育」については、中室牧子さんも「教育の経済学」で言われているし、「花まる学習会」の高濱さんにも4歳から9歳までの幼児期の教育に投資したほうが圧倒的にいいというお話をいただいたところである。県としてこれまで幼児教育は、どちらかというと基礎自治体にお任せという感じがあったので、基礎自治体との役割分担は考えつつも、県全体として幼児教育のレベルアップに対してどう取り組んでいくか、これからよく研究していきたい。
- エンジニアリング教育の輸出については、昨年、マハティール元首相にお会いしたときも同趣旨のお話をいただいた。元首相自身は、本田宗一郎さんとともに鈴鹿サーキットにおいて、ASEAN10カ国の若者を集めて合宿形式で、ものづくり、日本の教育、日本らしいものの方とかを学ぶ「IATSS（国際交通安全学会）」という活動を20年以上ずっと続けていただい

ている。

- エンジニアリング教育では、三重県にはICETT（国際環境技術移転センター）があり、四日市公害を経験してきたので、土壌汚染、大気汚染や水質汚染などを乗り越えるための環境技術を各国政府、行政関係者あるいはエンジニアたちに対して教育することができる。これまで25年間で89カ国8,000人の方々に教育をしてきたので、環境と産業の調和、環境と経済の両立のような形で、エンジニアリング教育と環境教育を両輪で輸出したり、海外に貢献していくことができる県だと思う。

○安藤委員

- 今ない仕事に将来就くかもしれない、何があっても生き抜いていく人間になったほうがいいということだが、人工知能はじめいろいろと発展してくることで、事は足りてもワクワク欠乏症みたいなところが出てくるのではないか。それを求めるときに、ワクワクさせられる人、例えば「利他の心」や周りを巻き込んでいける力、周りにワクワクを与えられる人の根底にあるのは、やはり「自己肯定感」が高いことである。
- 幼児教育について、私も保育園を2園経営しているが、幼児に何をさせるかという「do」の部分と、自己肯定の心でいるのかどうかという「be」の部分のバランスが重要だと思う。お母さんは基本的に共同で育児していくという本能があるが、現実には8～9割が核家族化し、共同育児をしていく環境が希薄な状況にある。私の保育園でも、母親をほめると子どもが元気になる。母親をほめると子どもが元気になるというのは、「親の機嫌がいいと子どもは自信を持つ」という言い方ができる。
- 幼児というのは、自己肯定感の最初の土台でもある。子どもは親の機嫌が悪いと、幼いなながらも自分が悪いのではないかと思ったり、自信を失ってしまうところがあるので、親の機嫌がいいと子どもは自信を持ち、自己肯定感の最初の土台が確固たるものとなる。その上で「do」という柱を立てていくことができると思うが、その土壌という意味の心のあり方の「be」の部分、子どもに働きかける幼児教育もあるが、育児途中の親に働きかけるあり方、親の機嫌、親をほめる、そのようなモデルというのも重要な観点である。

○清水委員

- 戦国末から安土桃山時代の頃に多くの外国の宣教師がやって来て、例えばフランシスコ・ザビエルとかアレッサンドロ・ヴァリニャーノなどが日本の社会を見ていろいろなことを指摘しているが、それは今日の教育を考える場合にも参考になるのではないか。日本人は非常に貧しい、しかしそれを恥とはしない、名誉を重んずる、非常に清潔である、そして一様に、日本の子どもたちは聡明である、非常に頭がいい、我々の言うことをすぐ覚える、我々が説く内容も非常に理解が早い、そんなことを一様に指摘している。
- 明治維新以後、お雇い外国人がたくさん日本にやってきたが、その人たちが日本の社会を見て、かつて宣教師たちが指摘したのと同じようなことを言っている。日本人の資質あるいは能力を、もしこの日本に鉄と石炭を与えたら、たちまちのうちに産業革命ができたであろう。それはなぜなのかを考えた場合によく指摘されることは、近世の教育が優れていたからであり、近世の庶民教育には大きな力があつた、近代の西洋文明を受容するだけの力が日本人に備わっていたからである。
- 中世末の宣教師たちの言葉をそのまま信ずると、必ずしも近世の教育だけでなく、もともと日本人の持っている資質が極めて高かったことになる。今いろいろな日本人の問題点が指摘されるが、我々日本民族の持っている資質を、もう一度虚心に、自信を持って見直す必要があるのではないか。

- 去年、ノーベル物理学賞と生理学・医学賞を2人の優れた日本人が受賞された。とりわけ、私が感銘したのは大村智博士で、地方大学を出られ、非常な苦学をしてあの優れた発見につながり、何億人という人を救うすばらしい発見をされた。厳しいと言われていた北里大学あるいは北里研究所を立て直したのが大村博士で、神を敬い、祖先を尊ぶ「敬神崇祖」と色紙に書いてみんなに与えているそうで、日本人の心をしっかりと持っておられる。地方大学からこういう方が出られたことに新たな希望と勇気をいただいたので、三重大学からも可能性がある。
- 精神科学や精神文化の分野で世界に理解されることは非常に難しいと思うが、川端康成がノーベル文学賞を受賞し、日本的な情緒、日本的な心、それが世界に理解された。ノーベル文学賞を受賞したときの講演「春は花、夏ホトトギス、秋は月、冬雪さえて涼しかりけり」には、日本の四季感や美感、美意識、心や哲学が凝縮して表現されている。
- 日本の文化、精神、心というものを世界に紹介していく、日本文化を発信するというをよく言うが、実は非常に難しい話だと思う。よほどすばらしい語学力でないと真の伝わり方はしない。日常会話はできても、真の理解を世界に広めるためには、本当に安易な語学力では対応できないだろうと思う。
- 今、第2次安倍内閣の教育再生実行会議の中で道德教育の教科化が本格化し、早ければ平成30年に小学校、さらに中学校に導入されようとしている。戦後日本の歴史の中で、道德教育は、国が価値観を押しつけるのではないかという警戒感や、政治的なイデオロギーの争点になってしまい、約60年間実現しなかったという課題に風穴を開けることになった。このことは学校教育現場で道德教育が停滞しただけではなく、研究者によって学問的に道德教育を追究することも停滞した。
- 道德教育が教科になって行われると、いろいろな点でプラスになると思う。週1時間の道德の授業が確実に実施され、当然評価が行われることになるが、教科書や評価をどうするのかということが非常に難しい問題である。数値による評価ができないので、総合的な学習時間のように一人ひとりの行動をしっかりと把握して、どのように成長していくのか、多面的な観点から児童一人ひとりの資質を伸ばし勇気づける、意欲を高めるような記述式の評価をしていくべきである。これもどうしたらいいかを研究しなければならないし、検定の教科書が使用されることになるので、どういう教科書がふさわしいのか、授業の指導法も今後研究されることになる。「道德科」という科目の免許が発行されると、それについての研究が大学で本格的に始まり、道德とその関連の科目の講義が始まり、研究自体も進んでいくのではないか。
- 一番望んでいるのは、学校が変わること。いじめをはじめ、今、学校現場で教員が非常な時間を費やして取り組んでいる様々な問題、生徒指導の問題、問題行動が少しでも減っていき、教員が本来の教育に集中できることが期待できる。そうなると、教員の意識が変わり、使命感も喜びも湧いてきて、道德が学校教育の中核として実は非常に大事だということが、もう一度再認識されるのではないか。三重県が道德教育の研究会をつくり、どのように教え、どのように導いていくか、教科書づくりや評価の仕方などに取り組んでいただくことが、三重県のみならず日本の教育の、特に人間教育の基本となる部分なので、今後の取り組むべき大きな課題ではないかと思う。

○貝ノ瀬座長

- 道德の特別教科化については、知事が7、8年前に内閣官房にみえたときほうまくいかなかった。このたびは何とかなったが、今言われたことは三重県はもちろん、全国的な課題であ

り、これから本格的に取り組まないといけない。

○前野委員

- 「ハッピー・ワークショップ」について、ハッピー・ワークショップというのは、幸せを広げるために、幸せの要因は分かっているのをみんなで見直そうという活動である。この前、夫婦のハッピー・ワークショップとか親子のハッピー・ワークショップをやったが、お母さんをほめると子どもが元気になるというのを本当に実感した。夫婦でハッピー・ワークショップというのは、夢を語り合ったり、いろいろな人に感謝をしたり、前向きになれないことを言ってそれをポジティブに言い直すとか、自己啓発みたいなことで、ほめるとか自己肯定するととにかく夫婦がすごく仲良くなる。親を幸せにすると子どもはすくすく伸びる。本当に家庭教育、特に親が生き生きすることはすごく大事だと思う。
- 「マインドフルネス」について、マインドフルネスというのは、今、グーグルが全社員に行っている瞑想とか禅みたいな活動で、感謝の瞑想とか愛、コンパッション（慈愛）の瞑想をすると心が整って、心が幸せな状態になる。そうすると、社員のパフォーマンスは上がるし、創造性も上がるし、欠勤率は下がるし、離職率も下がる。幸せ度を高めて心を落ち着けておくと、社員のパフォーマンスも上がって、結局、社員とか地域がよくなるという活動である。
- マインドフルネスは、もともとは日本の禅とか南方の仏教がアメリカに行ったもので、それが今、日本に逆輸入されている。本来日本の文化の1つである仏教的な、あるいは神道も含めて、心を落ち着ける考え方が日本発でできず、アメリカを回って、グーグルがやっているからと日本に入ってくるのは、ものすごく歯がゆい思いをしていた。鎌倉は仏教の地なので、「禅2.0」と名付けて大々的にマインドフルネスを日本から発信しようと活動しているが、もともと明治維新の前は神仏習合で日本のまさにいいところだったのに、今は何か別々にされたみたいになって非常にもったいない。まさに日本の素晴らしい文化なので、京都や鎌倉の仏教と伊勢の神道で連携して、一緒になって新しい日本の文化をオリンピックぐらいまでに世界に発信することを、ぜひ大学連携もさせていただいて、一緒にやれるといいと思う。
- デザイン思考、イノベーションの手法というのもカリフォルニアから入ってきて、日本でカリフォルニアのデザイン思考を真似してやっている。スタンフォード大学の教員と話していたら、「日本がみんなで協力してやっているのがアメリカ人にはできないから、“デザイン思考”と言って協力するやり方をアメリカ人に教えたのに、それを日本人が真似しているなんて、大丈夫か」と言われた。これはまさに、日本の連携する力というのが失われ、いろいろな日本の良さ、幸せとイノベーションの両方とも、日本では残念なことに、逆輸入になっているので、これからの時代はいい意味での原点回帰だと思う。外から輸入するのではなく、外から久しぶりに気づかせてもらったので、本当の日本の良さを再発見して、2020年とかポスト伊勢志摩サミットなどこれからの時代に、逆輸入も含めて再構築し、日本からもう一度再発信することができればいいのではないかな。

○貝ノ瀬座長

- 一部であるが、公立学校でいわゆる瞑想、「心の時間」と言って10分か15分、朝、始まる前にやっているところもある。禅は聞いたことはない。

○西口委員

- 幼児教育は、遊び、体験活動が中心になるが、「私が大人になって生きていく知恵は、すべて幼稚園の砂場にあった」という有名な言葉がある。いかに幼児教育の中に体験活動を入れながら、遊びを中心にして教育していくかということが1つのキーだと思う。それを次の小学校段階にどうつなげていくか、幼稚園の教員も、小学校に行って学んだものにつながって

いくようにしなければいけないし、小学校の教員ももう一度幼稚園教育の内容を知らなければいけない。

- 少しでも雨が降ると長靴をはいて子どもが学校へ来るので、なぜ長靴で来るんだろうと思っていたら、雨が上がると運動場へ出て行って、水たまりに入っていたり、水路をつくってみたりする。そこで得てくる知恵というのはすごくて、思っているよりも水たまりが深いとか、そういうことが学べるので、やはり幼児期、小学校4年までにいかに子どもたちの特性を見つめて、学校として保護者と共有していけるかが大事だと思う。
- 家庭教育を語るときに、家庭の教育力ということを考えなければならないが、私たち教職員はいろいろなことが起こるとすぐに家庭に協力を求めようという話をする。そのときに教員は、家庭がそれだけの教育力を持ったところであるという前提に立って話をするところがあるが、そうではなくて、子どもを授かった家庭は、子どもの成長に合わせて教育力も伸びていくものであると思う。よく職員とも話をするが、それぞれの年代に合った形で家庭にきちんと話をして、家庭の教育力がだんだん大きくなっていく、強くなっていく、素敵に伸びていく、そんな働きかけを小学校、中学校、高校とそれぞれの段階で、家庭への発信をもう一度考えなければならないのではないかな。
- サミットの成果をどう活かすかについては、三重県民一人ひとりがサミットにいかに当事者として入っていけるのかということが、1つの大きなカギではないかなと思う。津市の子どもからは、すごく遠いところでサミットが開催されるが、例えば駅前に花を植えようとか、屋上から要人が飛んでいくヘリコプターを双眼鏡で眺めようとか、いかに当事者として、何らかの形で関わっていくことが次の成果につながっていくのだと思う。

○力石委員

- サミットのおもてなしについて、海外で日本の国歌を聞くと、日本にいる以上に自分の国に対しての思いが出てくる。今回、1つのおもてなしとして、海外から来られる首脳各国の国歌を、例えば小中高のブラスバンドが少し練習して、何かの機会にその国歌を吹奏するということが、最高のおもてなしになるのではないかな。
- 今、熱心に教育していただく教員が非常に少ないのではないかな。やはり教育というのは、教える教員の熱い思いとか、教員自身が夢を語れるとか、将来子どもたちが社会人になる意義とかを教育できる人材を育てていかなければいけないと思う。やはり教員ももう少し海外、留学なり、あるいは教える教員の1つのプログラムをつくって、どういう人材を育てていくかというのが必要ではないかな。ディズニーランドやリッツ・カールトン、スターバックスなどは、訓練よりも教育に大変力を入れているので、そういう1つの仕組みを、県として教える教員に対して行っていくことも大切ではないかな。

○貝ノ瀬座長

- 学校教育は教員がすべてと言ってもいいぐらいなので、国も、教員の育成指標をつくるということで検討が始まっているが、もう少し時間がかかるようである。自然体験なり、海外での異文化体験なり、教員も子どもも早い段階で本物の体験を得られると、かなり成果があると思う。

○藤沢委員

- サミットの教育大臣会合は岡山で行われるが、少し視点を変えて、経営者であるとか、そういった世界でのリーダーの方々の教育という観点で、少し三重県らしいサミットのテーマを出されたらどうか。日本のものづくりのイノベティブさというのは世界でもすごく注目されていて、なぜ日本のものづくりの要素・技術がどんどん進化していくのか、という話はよ

く聞かれる。要素・技術の組み合わせに関してはアメリカなどが進んでいると言われるが、なぜ日本のものづくりはこれほど世界最先端の技術がどんどん生まれてくるのかという議論をされるたびに、1つ言えるのは、歴史が続いている、人から人へ技術が伝承されているということだと思う。

- 世界を見たときに、残念ながら戦争などで、その地域で人から人への技術の伝承が行われている地域が非常に少ない。人がそこにずっといれば技術が伝承できるのかというと、もう1つ大切な要素があって、それはその技術を発注してくれる発注元がいるか、いないかということである。
- 今はトヨタとか大手が発注元であるが、歴史を振り返ってみると、ずっと技術を磨かざるを得ない発注をしてくれたのは伊勢神宮である。そういう意味では、日本における神社の役割というのは、精神的な支柱だけではなくて、技術を磨き続けるための発注事業元であった。そのような観点やビジネスの観点からも、伊勢神宮を見ていただく。今、世界の1つの課題は「持続可能性」なので、世界のリーダーの方々がいかに持続可能性を担保していく「学び」の仕組みをつくっていくかという、少し次元の高い「学び」というのを、三重からサミットで提示していただけたらどうか。

○貝ノ瀬座長

- 三重県版ダボス会議みたいなものがあったらいいのではないかな。

○藤沢委員

- 今回、東京と京都でやるが、三重でやっていただけて、これから毎年やっていただけるとありがたい。

○安藤委員

- サミットの成果として地域を発信する、インバウンドも含めて地域の経済が潤うという観点もあると思うが、「世界平和の一翼を担う」という観点での発信もあると思う。情緒性とか精神性、それから幼児教育にもつながると思うが、家庭円満とか、「家族は宇宙の象徴」、「家族は世界の縮図」であるとか、それを整えていくことで世界もまた整うという、家内安全、家庭円満、夫婦和合、家業に精を出すという毎日のことを大切にする。
- 例えば、家業に精を出すという観点は伝承にもつながるかもしれないし、家庭円満、家内安全、夫婦和合は幼児教育の根幹にもなってくる。サミットで三重県が潤う、伊勢志摩が潤うという観点ももちろん重要だが、伊勢神宮のあるところから、家庭円満、家内安全という日々の大切さが教育の根幹もイコールであると発信することで、「世界平和の一翼を担う」ことにつながる。世界平和に対する1つの提言ということも含めて、だからこそ日本人は「優しさの力」が育った、その「優しさの力」という1つのキーワードも含めて、それが育つ土壌が毎日の中にあるということが発信できればと思う。

○貝ノ瀬座長

- 優しさとか幸せ、そういうポジティブな価値をもっと大事にする。学力が低いなどいろいろ課題はあるが、弱みだけを何とかしようではなく、強みもたくさんあるので、まだ十分ではないがこれをモデル化するとこうなる、と広めるといいのではないかな。
- 知事は人脈が広いので、いろんな方たちに来てもらって、フォーラムとか発表会で発信したり、全国に向かって教育だけではない強みをもっともっと発信していく。そういうポジティブ思考で行くと、楽しいことになるのではないかなと思う。

●鈴木知事

- 特にサミットの関係では、従来日本にあって失われつつあるものを再構築して、もう一度発

信していく機会とするべきだということを、ドイツ通信社の東京支局長が「第2回伊勢志摩サミットフォーラム」で言っていたので、そういう機会になるように取り組みたい。

- 「優しさの力」的な部分については、サミットを誘致するときの計画書の一番の柱が、「寛容に受け入れあって、ともに生きていく」なので、人種、宗派、性別、世代を越えて寛容に受け入れ合っていくことが大事だということが発信できる。だから今、G7の首脳がこの伊勢の地に集うことに意味があるということを誘致計画書に書いたので、まさにそういう発信ができるようにしていきたい。
- 日本人の持っている資質的な部分について、今一度見直していくことは本当に大事なことであるが、抽象的、総論的に提示すると分かりにくいので、何か三重県とゆかりのある具体的な例から、例えば杉原千畝はお父さんが桑名税務署で働いていたので、5歳と6歳のときには三重県にいて桑名の日進小学校に通っていたとか、そういうのを伝えつつ、杉原千畝が示した日本人としての思いとか資質みたいなのところも教えたり、提示したり、議論したりできるようにすると非常にいいのかなと思う。
- 道徳教育の研究会については、私の2期目の政策集にも書いてあって、三重県として教科化をにらんでどういう方針で臨んでいくべきなのかというのを、有識者委員会をつくって第1回目をスタートさせていただいた。その中には郷土教育も含めてやっていこうということで現在考えていて、これから進めていきたいと思う。
- たくさんの方がサミットに参画して欲しい。2月16日がちょうど100日前になるので、ここからは県民の皆さんの行動を喚起するフェーズに変えていこうといろいろな企画・イベントを考えているので、1人でも多くの県民の皆さんの参画を期待したい。平成30年に、昭和48年以来45年ぶりにインターハイを三重県で開催するので、それもしっかり頑張っていきたい。
- 持続可能性を担保する、少し高い次元の「学び」の仕組みの話、三重県版ダボス会議の話をしていただいた。実は今、土屋聡さんと相談させてもらっているので、ダボス会議などのリーダーの人たちが集まる機会を、世界経済フォーラムとも議論しながら、少し高い次元のリーダーの皆さんに集ってもらう機会を考えていきたいと思っている。

以上